The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仰げば尊し
Author(s)	松原, 秀江
Citation	語文. 2019, 112, p. 5-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77197
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仰げば尊し

松原秀江

田中先生が亡くなられて、あっという間に信多先生も逝ってしまわれた。しばらくぼんやりしていた。少し落ち着いただろうか。

信多先生に初めてお目にかかったのは、大学に入った年だった。先生は私たちのクラス担任だった。先生も、奈良女子大学に赴任されたばかりだったのではなかろうか。新進気鋭の学者だと、あちこちで囁く声が聞こえていた。先生はそんな声に無頓着で、何か外のことに気を取られているようだった。

私は高校の図書館で見つけた、谷崎潤一郎の現代仮名遣いで書かれた新々訳源氏物語を読んで、夢に見る程夢中になり、大学に入って大系本で読み終えて、大河のような五十四帖の流れの中では、世界が小さくてつまらない、などと思った宇治十帖を再度読み直して、涙が止まらず授業に遅れそうになり、裏門から馳け込んだりしていた。

三回生になって、専門の授業が始まるまで、先生との接点は何もない。池田亀鑑の『源氏物語大成』を基本にした曽沢先生の本文校合や、信多先生の語り本系と読み本系の違いまである平家物語の授業を受け、永遠の価値があると思っていた古典の本文が揺れているのにびっくりした。これが大学の授業なのだと思ったことを、今もよく覚えている。信多先生が御自身の研究に基づき、自信をもって大きな声ではきはきと話される、中世から近世にかけての文学史の流れも、高校の教科書や参考書にはなく、ノートを取っていても、漢字を当てることができずに、授業が終ると図書館に飛び込んで、片仮名で書いた言葉を、漢字に直すのに必死だった。私はそれまで知らなかった新しい世界にいた。

その思いは、演習が始まり、原本主義の先生が挿絵に言及された時、頂点に達したと云ってよいだろうか。板本など見たこともなかった。にもかかわらず、その新しい世界は、私のそれまでの幼い世界と、クロスし始めていた。先生が取り上げられた『好色五人女』は、堀口大学の「お七の火」に憧がれていた私にとって、興味津津だった。しかも先生が典拠として示された『伊勢物語』

は、入試で森重先生の出された問題を解くうちに、こんな解釈もあるのかと驚嘆し、片桐先生の第一次伊勢物語・第二次伊勢物語・第三次伊勢物語の読者が作者になって、増補されてゆく過程には、すっかり魅せられていたから、大好きだった幾何の合同・相似にも似た、本文も含む先生のその典拠探しの授業には、目を見張る思いだった。しかもその頃、福音館書店の絵本の刊行が始まっていた。教育学科に幼児教育課程のある女子大の生協には、今も名作と云われる数々の絵本が、刊行ごとに所狭しと並び、中原淳一の絵の満載された雑誌・ひまわりやそれいゆに、中学生の頃夢中だった私は、それらの絵本の前に釘づけになっていた。そして絵本を卒論にしたいと思った位だから、ゼミは信多先生に決まっていた。

だがだからと云って、研究の道に進もうなどとは思ってもいなかった。そんな道があることも知らなかった。女なのに四年制の大学に入学できたこと自体、感謝しなければならない時代だった。あれやこれやの挙句の果てに、入試に合格した時、父は「あの馬鹿が！」と云ったものである。列車の中も走って来たかった私が、見送りに来ていた父をふと見ると、くるっと背を向けてしまっていた。大切に育てお金も手にしたことのない娘が、心配で心配でたまらなかったのだろう。全国から集まった私たちは、初めの一年間、寮に入ることを義務づけられていた。みんな大学に来たことが嬉しくて、グルグル廻る安物のスカートをはき、靴がこわれてパカパカ鳴るのも気づかず、よく勉強した。朝起きて顔を洗うと、御飯前にノートを持って、道路一本隔てた大学の教室に、席とりに行くのである。ちょっと遅れると、座りたい席はみんなノートに占められていて、がっかりしたものだ。

だが、四年間の学生生活が終り、卒業式の当日、華やかで喜びにあふれた家政学部の学生達に比べ、私たち文学部の一角が、ひどく暗かったことを覚えている。就職の決まらない人が多かったからだ。私も唖然とするようなことがあり、高校の教師になることなど、やめてしまっていた。あの時大学へ行った方がいいよ、と云ってくれていた男友達から、会社で大学院に行くことを勧められたのでそうしたこと、将来自分の設計した自動車が、世界中を走り廻るだろう、などと書いた手紙が来なかったら、私はどうしたろう。口数の少ない信頼していた友達だったから、そんなら私もと、簡単に私は大学院行きを決めてしまったのである。

そしてその旨、信多先生に云いに行くと、先生は云われたものだ。

金がいるぞ。就職の世話はできない。女性差別はあるぞ。これら三つのことは自分にはどうにもならないが、他のことならなんでもしてやろう。

と。それで十分だった。先生は女に学問はできない、清水好子さんのような人がいても、それは例外だ、などとは云われなかった。先生が亡くなられた時、大学で同じゼミだった友達から、先生は学問を続ける女性の少ないことを、とても残念がられていたと、すぐ手紙が来たくらいだから。私たち文学部、特に国文の学生は、

学問と就職は別だ、金や就職の為に、大学に来て学んでいるのではないと、云われていた。先生も継ぐべき会社のある家の独り子なのに、文学の道に進まれた方である。先生には又、安田富貴子さんのような友達がいたからだろうか。

私は演劇研究会の訪書旅行で、先生に薦められた朝日ペンタックスのカメラをさげ、ライトを持って、三脚を肩にかけ、先生と安田さんの後について、よく歩いたものだ。宮崎で見た草原にあか〳〵と広がる、夕陽の何と美しかったことか!!今もありありと思い出すことができる。

先生は書斎も本も、わがもののように使わせて下さった。見たいと思う本のある図書館や文庫に、丁寧な紹介状を書いて下さった。そしてよく云われたものである。

とりあえず勉強しよう。結果は後からついてくる。

と。その言葉通り、若くて一途な先生は、私の実力などおかまいなしに、いつも容赦のない力のこもった直球を投げてこられた。私は必死で受け止めながら、自分の腑甲斐なさが悔しく無念で、何度トイレに馳け込んで泣いただろう。馳け込む暇もなく涙の方が先に溢れてしまった時、先生は「君が泣くか!!」と怒鳴り、私は私で「シマッタ!!手加減などされたらどうしよう」と、息の根も止まる思いだった。そんな時先生はとても優しい。研究室から出て来られて、「お茶飲む?」と云われ、喫茶店に連れて行って下さると、進行中の研究の話を、次から次へとされ、

一生懸命やっていると、資料の方から飛び込んで来るんだ!!

などと上機嫌だった。

修士課程が終り、内定していた就職先から、年齢が高いからと断わられた時、切望していた職種だけに、身動きもできない程打ちのめされていた私に、先生は又、既に阪大に行かれていたのに、

学者の世界にも女性差別はあるけど、一般社会程でないから、やってごらん。

と手を差しのべて下さったのである。阪大の博士課程に入れて下さったのは、『中世文学論研究』の著者として、憧れていた田中先生である。助手にして下さったのも。そろそろ本を出してはどうかと云われ、学位が取れるから申請しなさい、と勧めて下さったのも。「盲どちどち手の鳴る方へ!!」とは、女子学生にはと、どこも誰も見せてくれなかったわ印の板本のコピーを、学問上の事だから貸さないが通いなさいと、見せて下さった野間先生の言葉である。何も知らない私は、先生方の鳴らす手の音に導かれ、思いも寄らない幸せな道を歩んで、今に至っている。

就職の世話はできない。

と云われた信多先生が、「女でもいいと云った。どうする」と聞いて下さり、私は姫路短期大学に就職したのである。先生は「松原君は遠くへ行くんだ〳〵」と云われ、田中先生も「いいのですか」と何度も念を押され、北海道からやって来て、大阪・姫路間など一飛だと思っていた私も、新快速のない当時、須磨・明石を過ぎ、景色が一変すると、光源氏の悲哀がわかったような気がしたもの

だった。

だが、阪大の後輩の言葉通り、そこには、家から通える範囲内の県立短大を選んだ、多くの優秀な学生が集まっていた。入学して一年後の成長は既に目覚しく、百人も超える授業になると、集中する熱気が壁のように押し寄せ、ひっくり返りそうになるのを気力で押し返し、私は授業を進めたりもした。助手になり、受賞した学会賞を支えに、活躍している卒業生もいた。県内に講演などに出かけると、「姫短の卒業生は優秀ですネ」と何度も云われ、どんなに誇らしく嬉しく思ったことか。時代の流れに即して、今は大学院も完備した共学の四年制だが、震災がなく、県の財政も悪化しなければ、国立大学を吸収合併する勢いの中にあった。

車窓に広がる瀬戸内の海を、研究会に諸本調査にと、私は何度馳け抜けたろう。定年前に神戸に移り、方向は逆だが、お見舞いも兼ねて、先生の笑顔を見る為にも。

私の言葉に自らの非力に苛立ち、所構わず涙を流していた学生の姿が懐しい。

（まつばら・ひでえ　兵庫県立大学名誉教授）